「元気！六郷復興の集い」の支援

１１月２日（土）仙台市若林区の六郷市民センターにおいて「元気！六郷復興の集い～希望の光を～」と題してイベントが開催されました。このイベントは震災後に六郷地区12町内会で企画され、今回で３回目を迎えます。前身は「六郷市民センター祭り」として、地域の秋のコミュニティの場として、各種の習い事や講座を受けている人たちの発表会が行われていたものです。

震災の年は多くの住民が家や職を失い、心も傷つき、非常に大きなダメージの中で、この時期を迎えなければいけませんでした。実行委員からは実施を危ぶむ声もありましたが「これから頑張って復興していかなければいけない」との思いから「みんなに元気になってもらおう」と困難な状況の中、委員達の意見の相違を乗り越え「名前を変えて決行を決意した」と、実行委員長の若林区上飯田南町内会の太田善雄会長は話されていました。

震災当時この六郷地区の沿岸部（東六郷）では１００余名の犠牲者が出て、全体の半分の世帯が避難所での生活を余儀なくされました。「六郷市民センター」でも８５０人あまりの人たちが避難して来ましたが、避難所としての位置づけや、職員と住民との関わり方が明確ではなく、混乱した状態がしばらく続きました。その対応に職員の方々は大変苦労されたとのことでした。

この地域の沿岸部では津波で建物が流され土台のみが残り、今はまわりに雑草が生い茂る空しい風景が続きます。１１月２日現在２年8ヶ月が過ぎ徐々に落ち着きを取り戻しつつありますが、まだまだ住環境などは整っていません。県道亘理塩釜線の海側は危険地域に指定され住宅の再建築は出来ないことになりました。そこに住んでいた人たちは２～３年後に出来る予定の復興住宅に移り住むことになっていますが、土地の取得や選定が難航している状態で先の見通しがまだ立たないでいます。

危険地域以外の場所では住宅再建が可能で、リフォームや建て替えをして徐々に戻られている人もいます。しかし、なかにはその時に悲惨な光景を目の当たりにし「戻る気持ちになれない」という人たちも多くいます。だからと言って新たにローンを組み住まいを購入するのも難しい状況だとも言います。

そんな中「みんなに元気になってもらおう」とこのイベントが開かれました。天候にも恵まれ参加者は約２５００人と大盛況、昨年より多い人出だと言います。近くに建設されたニッペリア仮設住宅や近隣の見なし仮設住宅の住人の方々も多くいらしたとのことでした。

会場の野外では地元商店や雄志グループが出店をし、焼きそば、玉こん、野菜などを販売していました。屋内に入ると水彩画、パッチワーク、絵手紙、写真のサークルの作品展示が目を引きました。どれもレベルが高く充実した活動がなされているのが感じられます。また体育館のステージでは民謡や踊り、フラダンスが大観衆の前で次々披露されていました。出演者達は各サークルごとにユニフォームをそろえ緊張の中にも楽しく一所懸命がんばっている姿が伺えました。その他に児童館コーナーや健康チェック、体力測定などが有り、家族で半日楽しく過せる内容になっていました。

太田会長とは発災当初、東北ヘルプ川上事務局長が六郷地区の支援活動をしていた際に町内会連合を通じて、避難所で知り合いました。物資や食料を協力し合いながら配布をしていき、それからの縁で、何かある時はお声をかけて頂いています。昨年も「上飯田南町　納涼盆踊り大会」にて協賛させて頂きました。

太田会長の思いはこのイベントの最後に行われる「大抽選会」で、少しでもいいものを沢山くばり、皆さんに喜んでもらおうという考えでした。そこで「東北ヘルプさんに声をかけさせてもらった」とおっしゃっていました。そして事前に阿部副理事長が六郷市民センターへお伺いをし、太田会長と職員の方に協賛金として５万円をお渡しし、抽選会の景品（トートバック、気仙沼ホヤボーヤなど）の購入費として使っていただきました。太田会長と職員の方は「おかげで皆さんに喜んでもらいました」と嬉しそうでした。そして「復興するまでは、まだまだ時間がかかるかもしれませんが、早く元の名前に戻れるように頑張りたい」と話していました。

(文責　東北ヘルプ理事　阿部／職員　戸枝)

協賛金をお届けいたしました

子供や若者も多く賑わう

熱心に踊られるフラダンス

見事なパッチワーク

左 抽選箱を振る太田会長　右 水戸黄門

ずらりと並んだ抽選会の景品